

中国人のインド巡礼

——『大唐西域記』の虚構性について——

若 江 賢 三

はじめに

1 竹杖婆羅門の伝承

2 梵衍那国の石仏

むすび

はじめに

4世紀末から5世紀(399~412年)にかけて、六十余歳という高齢を押し、インドを訪問したのが法顕であった。『高僧法顕伝』(『大正大蔵経』51巻所収)によると、このころのインドは「仏法甚だ盛ん」であった。僧侶や伽藍がそれを物語るばかりでなく、中インドにおいては「王治に刑斬を用いず。罪ある者は但し其の錢を罰すること事の輕重に従ふ。復た悪逆を為さんと謀ると雖も右手を載るに過ぎざるのみ」とあり、仏教の精神が文化の中に生きていた。仏教を信奉した阿育王の文化政策もまだ活力を失っていなかったことが知れるのである。

しかるに、7世紀前半に同じインドを旅した玄奘の眼には、必ずしもあこがれの「中国」とは映ってはいなかったようである。「大唐の天下を有つや、寰宇を闢きて帝国を創る(中略)功は造化に俟しく、明は照臨に等し(867頁)」という秘書著作左郎敬播の序文にあるように、唐王朝を讚美する姿勢で貫かれており、それは、「大唐極を御し、天に則り、時に乗じ紀を握り、六合を一にして光宅す」という自身(といっても文章にしたのは辯機であるが)の語も同じ立場にあることを物語っている。彼には仏法を王法の上に位置づけようとする姿勢が見られない。いわば唐王朝の政權に媚びを売っているとすら思われる。

さらに「黒嶺已來、胡俗に非ざるなし。戎人と同貫にして族類群分すと雖も、界を画し疆を封じ、おおむね土着す。城郭を建て務めて田畜を殖し、性は財賄を重んじ、俗は仁義を輕んず。嫁娶は礼なく尊卑は次なし。婦の言は是れ用ひ、男の位は下に居る(869頁)」とあるように、儒教的価値観を以てインドの風習を批判しているのである。

このように、玄奘は伝統的中国の価値観に立っている。とするならば、彼の經典を求めてのインド巡礼は、必ずしも純粹に求法の旅ではなかった、という可能性が考えられるのである。むしろ唐王朝の威光をインドの地に伝えよう、とする立場が濃厚にあったと思われる。

『大唐西域記』は玄奘と辯機との合作と言えるであろうが、その中に、やや強引と思われる記述が諸処に見られる。今回は、竹杖婆羅門の伝承とバーミヤンの仏像の丈の問題を通して、この書の虚構性の一端を述べてみたい。

1 竹杖婆羅門の伝承

卷九の摩伽陀国下には、佛陀伐那山の竹杖婆羅門が、釈迦の身長を測ろうとして失敗した話が記されている。そこには

鶏足山の東北百余里を行きて佛陀伐那山に至る。林竹修篠山を被ひ谷に満つ。その先、婆羅門有りて釈迦の身長丈六なるを聞き、常に疑惑を懐き、未だ之を信ぜざるなり。乃ち丈六の竹杖を以て仏身を量らんと欲す。恒に杖端出て丈六を過ゆ（恒於杖端出過丈六）。是くの如く高さを増して、能く実を窮むるなし。遂に杖を投げて去る。四に焉に根を植す。中に大卒塔婆あり。無憂王の建る所なり。（『大正新修大蔵経』巻51、920頁）

とある。内容は、釈迦の身長が1丈6尺であると聞いた婆羅門が、それを信じることができず、長さ1丈6尺の竹を用意して釈迦の身長を実際に測ってやろうと企てたが、失敗してその竹を投げ出し、そこから根が広がって竹林になった。その中にアショーカ王が大きな卒塔婆（仏塔）を建てたというものである。

問題は「恒於杖端出過丈六」の部分の解釈である。水谷真成訳（平凡社中国古典文学大系）では「測るたびに杖の端からなお1丈6尺も身が出ていた」とあるが、この訳はおかしい。何故ならば、竹の長さが1丈6尺であって、その端からさらに1丈6尺も身が出ていたというなら、その「1丈6尺」分はみ出ていたという「1丈6尺」はどのようにして測ったのか。もし、仮に測れたとしたら、その身長は倍の3丈2尺ということになり、「能く窮むるなし」と矛盾する。

次に、「測るたびに釈迦の1丈6尺の杖の端を過ぎていた」という解釈の可能性について検討する。その場合、釈迦の身長は1丈6尺プラスアルファであることが分かったことになる。婆羅門の当初の目的は、本当に釈迦が1丈6尺もあるのかどうか、を確かめることにあったはずである。もし釈迦の身長が竹杖を上回るのであれば、その当初の目標は達成できたのであって、「能く窮むるなし」とはやはり矛盾するのである。

このように見るならば、本文は「恒に杖端出て丈六を過ゆ」と読むしかないであろう。しかしてその意味するところは、測ろうとするたびに、測るための基準となるべき竹の端がシュルシュルと伸びてしまい、その故に計測不能となった、ということではなければならない。

さて、このように解するならば、この伝承を記した玄奘の意図が見えてくるのである。

玄奘は唐代初期の人である。唐代の「尺」は約30センチメートルであった。（日本に入ってきたのは唐代の尺であり、これが江戸時代にも使われていた。そのことは荻生徂徠が『度量衡考』において論証している。）従って、玄奘のいう「丈六」は約4メートル80センチということになる。この数字は、どう見ても人の身長ではありえない。ところで、玄奘が本気で釈迦の身長を「丈六」と思っていたのであろうか。どうもそうとは思われない。

唐代の知識人は、漢代以前の古典を読む際、人の身長として「八尺」という例を見ているはずであり、『論語』には子どもの身長として「六尺の孤児」とある例を見ているはずである。つまり、漢代以前には1尺が23センチメートル前後であることは承知していないはずはないのである。そして、唐代に至るまで、何度か尺が伸びて、そして唐代の30センチ尺に至ったことも知っている。要するに、身長を測るべき基準の物差し自体が変化しているのである。恐らく玄奘は、竹杖の端が伸びたという表現により、基準となるべき物差しの方が伸びたから測ることができなかった、ということを示そうとしたものと思われる。それがまた、釈尊の偉大さを凡夫が測ることができない、ということを表示せんとしたものと理解できるかと思われる。

では、この竹杖婆羅門の話は、以前から伝えられていたものであろうか。それははなはだ疑問である。というのは、そもそもインドの尺度で「丈六」はあり得ないからである。これは中国の単位であ

る。玄奘は唐王朝の威光が遠くインドまで及んでいた、と強調する。しかし、漢代にいうインドとの通路に当たるいわゆる西域ならともかく、インド中部の摩伽陀国の近くにまで唐王朝の威光と文化が及んでいたとは到底考え難いであろう。そして、この「丈六」とは一般の成人男性の八尺のちょうど倍である。これは、釈迦の偉大さを強調しようとする後世の弟子達により、その偉大な人格と併せて、一般人の倍の身長があるとして伝えられたものと解されている。

なお、仏典が漢訳され始めたのは後漢時代からである。初期の翻訳が、後世へ決定的な影響を残すことがある。度量衡もその一つである。例えば『大乘本生心地観経』巻2には、乳児が飲む母乳の量について「出胎し已に幼稚に及ぶの前、飲む所の母乳百八十斛」（『大正新修大蔵経』巻3、297頁）とある。これは唐の般若三蔵によって漢訳されたものであるが、これとは別に、これより以前に翻訳された『心地観経』があったとされる。恐らくそれが漢訳されたのは後漢時代であったと思われる。そこに「百八十斛」という語が記されていたはずである。ただし、これは、本来は「百八十斗」でなければならない。180斗は18斛であり、漢代であれば1斛=20リットルであるから、18斛は360リットル。従って、仮に1日平均0.5リットル飲んで丸2年、1日平均1.0リットルとすれば丸1年で18斛になる。これならば現実と合致する。恐らく、ある時点で、あるいは翻訳の時点で書写の誤りがあって、斗を斛としてしまったのであろう。その誤りを般若三蔵は引き継いだものと考えられる。そして、この数値がやがて一人歩きすることになる。唐代では、1斛は180リットルであるから、180斛は、実際の90倍の量となり、完全に現実からかけ離れてしまう。これが経典にある数値だから、とって有り難がられ、親を絶対視させようとする儒教思想と相まって、母親の有り難さを強調する材料として用いられたものと考えられるのである。

さて、玄奘のような知識人が、漢代以前に1丈が2.3メートルほどであったという事実を知らなかったはずはない。ところが、唐代では1丈=3メートルであり、従って「丈六」は何と4.8メートルとなる。また、インドにおいてこのような伝説がそのままの形で伝わっていたとする道理はない。玄奘は、そうした事実を充分に知りながら、唐王朝の徳が中インドまで及んでいると強調しようとしたのではないか、と思われる。その故に敢えて中国起源の尺や丈の単位を用いた伝承を創り出した、いわば確信犯であった可能性が強いと思われる。竹丈婆羅門の伝承自体はその原型はあったのであろうが、その竹竿の長さを丈六として脚色したのは玄奘に他ならないであろう。そうした傾向は、次に記すバーミヤンの石仏に関する記述の中にも窺われるのである。

2 梵衍那国の石仏

『大唐西域記』巻1に梵衍那（バーミヤン）国の石仏に関する記述がある。そこには、

王城の東北の山阿に立仏の石像あり、高さ百四五十尺。金色暎曜、宝飾煥爛たり。東に伽藍あり。此れ先王の建つる所なり。伽藍の東に鍬石の釈迦仏の立像あり、高さ百余尺。身を分かち別に鑄して総合して成立す。（中略）城東二三里の伽藍中に仏の入涅槃の臥像あり、長け千余尺。（『大正新修大蔵経』巻51、873頁）

とある。ここに記される「百四五十尺」の仏像とあるのは、本年（2001）、イスラムのタリバンによって破壊された西大仏と見られ、平凡社『世界美術大全集・中央アジア』によれば、その高さは55メートルであった。従って、その高さは唐代の尺では「百八十余尺」とするのが正しいと思われるが、これは目測であろうから、ほぼ正確な数値と見てよからう。当時は表面が綺麗に彩られていたであろう。前田耕作氏によれば、これは弥勒仏であろうという。

一方、その東にあったとされる伽藍のさらに東には高さ「百余尺」の鍬石（自然銅の質のよいもの）

製の仏像があったという。しかし、7世紀前半に既に鍮石製で、30メートルを越える銅製の仏像がこの地にあったと見ることが可能であろうか。座像ならばともかく、立像をこのような地域に建立することが技術的に可能であったとは思えない。

前述の前田氏によれば、これとは別に「百余尺」の弥勒菩薩の大像が立っており、それが東大仏であったという。西大仏と東大仏とをくらべると、その造りは西大仏の方が完成度は高いとされるのであるから、東大仏の方が早い時期に造られたことは疑いない。とするならば、玄奘のいう「百余尺」の大仏というのは、確かにこの東大仏のことを記したものであった、と見るしかない。西大仏は高さ38メートルであるから、正確には「百二十尺余」とすべきであった。前田氏は「おそらく現存する衣文の状態から見れば、塗金された像の腹部の継ぎ目を見誤ったものと思われる」というのであるが、これは疑問である。西大仏については石像と明記してあるのに、東大仏を鍮石製としたのは、単なる錯覚とは到底思えない。案内人もおり、かつ通訳となる者もいたと思われる旅であるから、説明も受けないで勝手に誤解したということが考えられるであろうか。この場合も、やはり確信犯と言えるのではなからうか。

なお、この大仏の向かって左の足下に右邊する通路の入り口があったという。玄奘は、現地の人に案内されたならば、そこを昇ったと思われる。(あるいはこれが造られたのは後世のことであろうか。これもまた疑問とするところである。)しかしそのことを敢えて記さなかったのではなからうか。そして西大仏は右邊道を造ろうとした痕跡は見られるが未完成であるという。だから、玄奘は西大仏には昇っていない。

次に、城のさらに東へ行くこと二三里の地に「長け千余尺」すなわち300メートルを越す大涅槃像があったと記している。これもにわかには信じ難い。同じく『大全集』によれば、7世紀から8世紀の作と推定される粘土製の涅槃像がタジキスタンのアジナ・テベに残っているが、全長の3分の1ばかりの中央部が残存していて、その長さが12メートル。従って全長でも40メートルにはならないであろう。他に、これに匹敵するような大涅槃像の存在したことは確認されていないのである。ここから類推して、玄奘が見た涅槃像の全長は1桁違っていると思われる。しかし、前に記述した内容から判断して、恐らくこれも確信犯であった、と解されるのである。

む す び

以上見てきたように、『大唐西域記』には虚構の部分がある。本稿ではそのほんの一端に触れたばかりであるが、同書を史料として用いるには、かなり綿密な史料批判の必要であることが浮かび上がってきたと思う。

では、何故そのような虚構が必要であったのか。それは未だ推測の域を出ないものではあるが、玄奘の場合は、必ずしも法を求めての求道の旅ではなく、唐王朝の威光をインドに伝えるという意図を当初より色濃くもっていた、という可能性が考えられる。

7世紀のインドでは、仏教はすでに衰退の傾向を示しており、法顕のように、あこがれの巡礼の旅とは言い難いものがある。また、唐王朝への体面からも、中国を宣揚し、唐こそがインドよりも偉大な世界の中心である、ということを宣伝する、という意図をもって『大唐西域記』は記されたのではなからうか。西域は漢代ではターリム盆地の諸国を指したが、同書では、文化大国であったインドをもこの西域の概念に入れ、自国に大の字を付けて大唐と称していることから、それは窺えるであろう。そして、この『大唐西域記』を演出したのが大総持寺沙門辯機であった。

<附記> 本稿は去る10月13日に行った公開講座の内容の一部に加筆したものである。